関西大学に「中村幸彦文庫」を創設

船越　一英

日本近世文学研究の泰斗、中村幸彦先生は平成３年８月に、先生が所蔵する図書資料を関西大学図書館に譲渡される旨約束してくださった。平成10年５月７日、先生は長逝される。その年の７月、ご遺族は生前のお約束に従い、ただちに学校法人関西大学との間で、譲渡を前提とする寄託の覚書を交わされたのであった。

関西大学は、この寄託された先生の旧蔵書を「中村幸彦文庫」と名称して、平成10年７月から関西大学図書館内に保管し、これの特別利用については平成12年12月より本学図書館ホームページ上で学内学外のかたがたに案内してきた。

平成13年３月、ご遺族の本学に対する深いご理解によって、先生の全蔵書が関西大学に譲渡されることになったのである。本学は同年３月12日をもって、図書館内に「中村幸彦文庫」を創設した。ここにご遺族に深甚なる謝意を表するとともに、中村先生を偲びつつ、あらためて「中村幸彦文庫」を紹介したい。

中村先生と関西大学

(1911-98)

中村幸彦先生は、兵庫県の現・洲本市にて旧制の洲本中学校を卒業。その後、旧制高等学校、京都帝国大学文学部を卒業し、同大学大学院に進まれている。

大学院在籍中に天理図書館司書になられ、稀書目録作成と綿屋文庫を担当。同館司書のとき、名著『古義堂文庫目録』を編纂。先生はこの編纂目録を生涯の学問、研究の基本としておられたという。天理図書館司書研究員ののち、天理大学教授、九州大学教授、同大学の文学部長を歴任されて、昭和46年４月関西大学文学部教授に着任されたのである。37年「戯作論」で文博。56年に、第32回「読売文学賞」受賞。先生が日本近世文学研究に大きな足跡を残され、その集大成となった『中村幸彦著述集』（全15巻、中央公論社刊）の全巻完結を待たず61年度「朝日賞」を受賞。62年には「大阪文化賞」を受賞されているが、聞くところによると、先生はこれらの後にも先にもその他種々の栄誉受賞を固辞されていた。

昭和48年10月から３年間、本学の図書館長をつとめられている。

先生が在任当時の図書館は、古い建物で機能性が乏しいうえに、蔵書の増加によって狭隘を極め、廊下や図書館長室にまで書架を並べる始末になっていた。しかも、昭和40年代前半には全国的に学園紛争がおこり、本学でも例外ではなく、学園紛争後の40年代後半は、図書館も新しい、より明確な構想をもって出発しなければならない時期にもあった。また、昭和48年の一年間に、図書館長は目まぐるしく３回交替した。見次―高尾―前田の３代館長のあとをうけられたのが、第10代館長の中村幸彦先生である。

先生は図書館長就任の翌年９月、大学図書委員会の下に図書館建築小委員会を設置して、新図書館構想のための調査を開始されている。すなわち、昭和60年４月に開館した現在の総合図書館建設構想に着手されたのである。その成果は、大学図書委員会の名による「図書館建築調査報告書」（昭和50年２月26日付）にまとめられ、これを全学的な委員会設置の要請をこめて学長に提出されたのであった。かくて、同年12月に学長の諮問機関とする図書館総合計画委員会が誕生し、各学部からの委員６名、学長推薦の委員４名で構成され、中村先生は委員長となって鋭意検討された。

本学に図書館報『籍苑』誌を発刊したのも中村先生である。その創刊号において、「去る（昭和51年）２月９日、第１回図書館総合計画委員会が開催され活発かつ多様な論議がおこなわれた」「これに先立ち、『図書館建築調査報告書』が図書委員会においてまとめられ」「学長に提出されたのは、昨年２月であった。以来ちょうど１年、こゝに新しい図書館への第１歩がふみだされたわけである。この委員会によせる期待はまことに大きいといわねばならない。

千里山本館と天六分館が創設されてからやがて半

世紀になる。専門図書館もすでに12年の歳月をかさねた。その間、できる限りの増築、改修等によってよくその任を果してきたが、いまは、全館的な機能の限度に直面しているのである。のみならず、本学の研究教育に対して、今後の図書館が担うべき役割は更に大なるものがあるこというまでもない。抜本的な構想と新図書館の建設が要望されるゆえんであり、この委員会の発足が、図書館はもとより本学にとって重要な意義をもつゆえんである」と記されていて、中村先生が中心となってまとめた新図書館建設構想が実現に向けて始動したのであった。

この昭和50年の報告書に盛られた構想の内容について、今まであまり紹介されることはなかった。この機会に、新図書館すなわち現・総合図書館のゆるぎない構想の骨子部分を掲載し、先生の先見性の一端として紹介しておきたい。

【新総合図書館機能（前掲「報告書」第５章より)**】**

図書館建築調査報告書

今後果される機能とは、単に限界に来た図書館機能の回復を意味するのでなく、むしろ将来の研究教育の発展に十分対応できる機能と、図書館自身が内包する運営・技術上の進歩に対応しうる機能の双方を意味する。これを総称して新しい図書館機能と呼ぶならば、新図書館はこの新しい機能を十分に果しうる条件を具備したものでなければならない。

５・１　新築図書館に期待される機能

５・１・１　総合図書館機能

(1) その第１は、大学における全学術図書・資料を総合的に運営するさいの、図書館の役割、機能である。一般にこれを総合図書館機能と称する。それは、研究教育の進歩と学術情報量の巨大化に伴って、大学図書館の近代化が焦眉の課題となり、全国的、国際的にネット・ワークの形成される過程でそれぞれ学術資料の組織化が進められ、そこから生れた図書館機能である。

本学の場合も、広く大学全体の立場に立てば、学部資料室、研究所（図書室）等に収蔵される図書・資料と、図書館所蔵のものが並存し、その間に有機的つながりが不十分であるといわざるをえず、これが全学的見地から緊密に組織化されるならば、大きな効果を生むであろうこと論をまたない。おそきに失したといっても過言ではないであろう。

全学々術資料の組織化には、それを運営するための全学的行政組織（例えば、全学図書・資料協議会）が必要であるが、具体的運営の中心となる総合図書館は、次の機能をもつべきである。

1. 全学学術図書・資料の総合的運営の中心となる。
2. 全学図書・資料の総合目録を整備する。
3. 大学の学術情報のセンターとなる。
4. 地域的、全国的ネット・ワークに対する窓口となる。
5. 国際交換業務の中心となる。

－２２－

6. 図書館に関する調査研究を行う。

(2) 以上の総合図書館機能は、新築図書館が受持つ。

５・１・２　学習図書館機能と研究図書館機能

冒頭に述べたとおり、研究・教育兼備の図書館は本学の伝統であり、今後もこれは堅持すべきである。しかも今日のごとき学問の進展からすれば、図書・資料の分散はできる限りさけなければならない。最も望ましいあり方は、現本館（臨時閲覧室を含む）、専門図書館を併せ一つにして所蔵図書・資料のより総合的かつ多面的運営をはかるべきである。

５・１・２・１　学習図書館機能

(1) 学習図書館は全学系を含むものとし、その機能をさらに充実させる必要がある。主題別閲覧室、雑誌室、参考室、展示室、グループ研究室等を設け、とくに座席数を大巾にふやす（１０％）ことが必要である。

(2) 学習図書館機能は、新築図書館が受持つ。

５・１・２・２　研究図書館機能

(1) 研究図書館は全学系を含むものとし、その機能をさらに充実させる必要がある。とくに情報活動に重点をおく。

そのために、総合研究に対する文献情報室、法学文献情報室、統計資料室、自然科学、工学文献情報室等を設け、また古文書室を整備して専門的情報活動を行う必要がある。

(2) 研究図書館機能は、新築図書館が受持つ。

５・１・３　中央図書館機能

(1) 天六分館との関係をさらに整備する。現在図書・資料収集業務は本館に集中しているが、加えて整理業務をも集中し、図書資料収集・整理のセンター とする。従って天六分館は利用サービスが活動の中心となるから、中央館との間に相互利用を一層強化する。

－２３－

(2) 中央図書館機能は、新築図書館が受持つ。

５・１・４　利用サービス機能

(1) 学術情報量の巨大化にいかに対処するかの問題は、結局のところ必要とする資料をいかにして発見し、いつどんな方法で入手するかによってきまる。そのためには、参考業務の充実、学内外相互利用の推進と複写業務の充実は不可欠である。

(2) 卒業生に対するサービスを現在より以上に充実させる。とくに情報サービスに力点をおくことを考える。また可能な方法によって地域へのサービスをも考慮する必要があろう。

５・１・５　図書資料の保管機能

大学図書館にとって、図書・資料の充実は永遠の課題である。だからこそ収容力の問題が常に提起される。しかしながらこのことは図書・資料にいわゆる新陳代謝がないことを意味するものではない。保管上にも利用上からも、そのための積極的措置は却って有効である。従って保存書庫ないし保存図書館の機能は全学的見地にたって大巾に拡大する必要がある。しかし旧図書館をいかに活用するかは全学的な検討に委ねるべきであり、九州大学のとった検討法がそれを例示する。

５・２　新築図書館の条件

新築図書館は以上の新しい諸機能を発揮しうるものでなければならない。今これを立地、規模、構造、設備に集約して考えれば次のごとくである。

－２４－

5・2・1 立　地

最大多数の利用者にとって最も便利な場所が望ましい。なお敷地については将来拡張の可能性を十分配慮しておく必要がある。

5・2・2 規　模

(1) 収容冊数　約150万冊

(2) 座席数　約2,200席（学生2,000席 院生100席 教職員100席）

(3) 総面積　約21,000㎡

5・2・3 構　造

(1) 機能を優先せしめ単純明快な設計が貫かれなければならない。

(2) 高層建築はさけて一階当り平面積を広くすることが望ましい。

(3) 図書館運営法の発展、技術の進歩に応じうる構造でなければならない。そのためにはモジュール方式を導入する必要があろう。

(4) 快適な居住性に留意すること。

5・2・4 設　備

(1) 機能を十分生かしうる設備が必要である。

(2) 書庫の設備には防湿・防火上特に厳重な配慮が必要である。

(3) 図書・資料の運搬について最適の手段を設けること。

(4) できる限り機械装置を導入し省力化をはかり、経済性に留意すること。

(5) 身体障害者の利用しやすい設備を具えること。

(6) 快適な雰囲気の確保につとめること。

5・3

(1) 以上は、本学図書館の将来構想に関し、その骨子を述べたものであ

－25－

新総合図書館は昭和58年２月に起工、59年10月竣工、いわゆる“中村構想”から10年後の60年４月開館しているが、先生らが構想した「大学の学術情報のセンターとなる」は、現在も本学図書館の基本理念として受け継がれ、このもとに各種施策を講じているのである。

中村先生の息の長い研究

中村幸彦先生は本学図書館長のとき、前掲新図書館建築構想に着手し、私立大学図書館協会常任理事校（昭和50-51年度）としての会務掌理と各種事業をおさめるほか、多忙をきわめていたが、図書館の古参の職員新人の職員を問わず、どの職員ともよく会話された。夏休みの休館日を利用して図書館の全職員で旅行する。先生はこれを大変楽しみにされていた。酒をくみかわしながら、小生らに「若い人達はいいね。これからいくらでも勉強ができるのだから」「（自然科学の抄録誌・索引誌のことに興味があります。いずれ『籍苑』誌に、『化学総覧』か *Chemical Abstracts* のことを書いてみたい、というと）古い本のことでなくても、そんな新しい技術のことでもいい。何かこれはというものがあれば」と。

また、「自分は図書館の司書が仕事の始まりですよ。あなたがたと同じ世界だった。仕事をよくする人は、その仕事に埋没してしまうかもしれない。そうならないために、あなたがたも、終生のテーマを早めに持ったらよい。はじめは、どんな小さなことでもよいと思うよ。そのうちに、気構えを大きくしていけばね」と。

夏の旅行 中村幸彦先生と図書館職員（後楽園にて）

本学の学生になった最初に与えられる書に『大学』（関西大学編集刊行）があった。昭和49年版に先生が「学問への道標」と題して、「云っておくべきは、どの学問分野を選んでも、具体的な技術や知識は違っても、対象の真実と価値を発見する能力は同性質のものである一事である。一つの真実＝価値を発見すべき対象がある。その為に必要な技術を身につけて、様々の知識＝批判材料を集める。それを吟味し配列し検討した上で、その対象を分析し批判し価値づける。このことは、どの学問も同じである」「しかし学問の道に入ったからとて、自然にその能力が可能になるのではない。絶えざる学問の錬磨によってこそである」「その努力あってこそ、学問は始めて向上の一路と云える。などと新しい学生諸君をおどすつもりではない。大学は学問をする処に出来ている。諸君さえそのつもりなら、自然の流れに沿って行きさえすれば、むつかしいことではない。気広く体豊かに浩然として、向上の一路を歩き給え」「ここで云う学問とは、専門家即ち学者になる為のみの学問ではない。しかし学者の学問とて、この埒外にあるものでは、決してない」と書かれている。

同『大学』の昭和60年版でインタビューに答えた先生がいうには、「研究するところがいくら精緻で微細のことであっても、気宇が大きくなければ、学問にはなりません」とも。先生が、洲本市のご自宅

で『中村幸彦著述集』第４巻に「近世小説史」をおさめるため、すべて書き下ろしをされる執筆中のおりであったという。インタビューには、現図書館長の山野博史先生が、当時本学広報委員会委員として『大学』に「学者訪問記」を掲載するために、昭和59年７月、洲本市のご自宅へ赴いてのことである。

平成11年６月７日付産経新聞に掲載された記事「『角川古語大辭典』全五巻が完結」によっても、中村先生は息の長い研究の仕事をされていることの一端を知ることができる。「四十年間にわたって編さん作業が続けられてきた『角川古語大辭典』全五巻がこのほど完結した」「このような大辞典となったのは、辞書作りの常識を超えた編さん方法（分担して専門とする作品、たとえば『道中膝栗毛』全編のなかから自分でコトバを拾って記述するやり方）を採用したからだという」「従来見逃されていた表現など『発見』がどんどん辞典に吸収され、中辞典が『大辭典』に成長せざるを得なくなった」「昨年五月、近世国文学研究の第一人者の中村幸彦氏が亡くなり、三人の編者は全員が故人に…。岡見正雄、阪倉篤義の両氏ともども完結を見とどけた編者が一人もいないことが、これまでの長い年月を実感させる」とある。

また、関西大学名誉教授の谷沢永一先生は、學燈社の『國文學』に追悼文を寄せている。1998年８月号誌上「中村幸彦先生追悼」と題するもので、少し長くなるが、その中の一部を掲げてみると、「先生は近世文藝の歴史的な潮流と重層性の把握をほとんど完璧に見きわめられた。士太夫の漢学をはじめとする伝統的な雅の世界と、浮世草子から俳諧を含む俗の領域との対比を見さだめ、その視野は川柳ならびに舌耕の分野にも及ぶ。雅と俗と、両者の並行と交錯をたどる視野の拡大は、先生によってその見事な範例が示された」

「先生が志された文学研究の核心は、古典をみだりに近代の思潮にそって当世風の裁断に赴かない自戒に発する。それぞれの作品が成立した時期において、底流していた社会常識と人間観にさかのぼり、同時代の風潮に即して解釈する姿勢である。すなわち作品が呼びおこす文藝的な感銘の実質を、過去の時代環境のなかに置き直して、追体験するための厳密な考証を基礎とする」

「中村先生における文藝研究の真骨頂は、或るひとつの作品が同時代の読者にとって、なにゆえ面白く興味があると受けとられたか、その間の事情を究明する考察であった。先生はそのあたりの急所を探りあてるために、ながい年月をかけて心を砕かれた」ということである。

以上の例として、平成10年９月25日付読売新聞に掲載された、「関西大図書館に『中村幸彦文庫』」の見出しによる記事のなかから、これもすこし長くなるが紹介しておこう。その記事の後段である。

「古書に詳しい関西大名誉教授の谷沢永一氏は中村氏の業績を振り返り、“膨大な本を読むことによって、他の学者が見逃したことを発見した人”と語る。例えば、『東海道中膝栗毛』の中に、作者の十返舎一九が宿場の順番を間違えて書いている個所が数か所ある。従来、なぜ一九が間違ったのかはなぞとされてきたが、中村氏は江戸時代に発行された旅行案内の中に、同じ間違いをしている『諸国道中記』を発見、一九が自ら旅をしたのではなく、同書を下敷きに『東海道中膝栗毛』を書いたことを明らかにした。

谷沢氏は“名著のたぐいだけを読んで研究したのでは、決して分からない真実があります。中村先生が集められた本の多くは、『道中記』や『遊女評判記』のような雑書なのですが、体系的な収集がなされているのが特徴です。文学ばかりか、歴史学、社会学、経済学など幅広い分野の研究者にとって、近世社会の隅々までも知ることのできる宝庫になるのではないでしょうか”と話している」。

なお、中村幸彦先生の年譜と著作（書誌）については、『中村幸彦著述集』第15巻か、または関西大学国文学会の紀要『國文學』第68号（平成３年12月）により、詳しく知ることができる。

「中村幸彦文庫」の概要

このように、中村幸彦先生が近世文学全般にわたり雅俗両面から読みほぐされた膨大な図書資料は、段ボール箱にして約1300個。平成10年７月30日、先生のご自宅の洲本市から、同年４月に開通した明石海峡大橋を渡ってきた。そして、「中村幸彦文庫」の名称のもとに、今、関西大学図書館の中にあるのである。

「中村幸彦文庫」は、その資料の多くを寄贈いただき、経年に譲渡されるものもある。全文庫の概要は、天下の孤本とされる南宋版『書経注疏』のほか、和漢籍、自筆ノート（大学ノート150冊余）、手沢本、洋装本、雑誌類などである。

これら全文庫の図書資料を整理し目録を作成するためには、相当の年月を要するものと思われる。中村幸彦先生は、蔵書を一括した文庫として、多くの学内学外の研究者が利用できることを念願されていたので、図書館としては、未整理の図書資料ではあるが、本学図書館のホームページ上に公開して、中村幸彦先生を広く顕彰するとともに、「特別の利用」による便をはかることにした。

洋装本は段ボール箱928箱。１箱に平均15～16冊入っているものと思われるが、そのジャンルや全容を把握するに至っていない。順次MARCデータを作成して、*KOALA*（関西大学蔵書検索システム）によって提供していく計画である。

一方、和漢籍についての概要は下記のとおりであり、参考までに、ホームページ上で検索できるリストを添付している。ただし同添付リストは、「中村幸彦文庫」を関西大学に迎えたとき、点検用に作成したものであって、いわゆる蔵書目録ではないことに留意していただく必要がある。書名等を適切に表現できていないものもあるが、これをもって「中村幸彦文庫」から資料を探し出す手がかりにしていただければよいかと思う。

「中村幸彦文庫」資料の利用に際しては、以上の点を留意のうえ、のちに掲げている利用案内にもとづいて申請していただければ幸いである。

⑴ 「中村幸彦文庫」の概要（順不同）

漢籍・漢詩文、仮名草子・浮世草子、談義本、随筆、読本、黄表紙、滑稽本、人情本、実録、歌書、俳諧、丸本、雑著、淡路関係書、など。

⑵ 和漢籍のリスト

関西大学図書館のホームページ

URL　http://www.kansai-u.ac.jp/Library/home.htm からアクセスしていただくと、「コレクション」より上記⑴の概要の項目に従って一覧していただくことができる。ただし、 3:00a.m.～9:00a.m.および第１土曜日はリストの表示ができないことにも留意いただくことになる。各種データベースの更新タイムであるため、了承いただくほかない。

また、JIS第１、第２水準以外の文字は、基本的にカタカナ、■または＝に置き換えている。

⑶ 展示したものから

関西大学が平成13年３月12日付で正式に「中村幸彦文庫」を創設した機会に、図書館において、春季特別展「中村幸彦先生を偲んで」を５月20日まで開催した。そのおり展観に供したものを、その『展観目録』から転載することによって、「中村幸彦文庫」資料の一端として紹介しておくことにする。十数点については、別途写真を添付しておいた。

仁斎学とのめぐりあい　－書誌学をみがく－

先生は天理図書館司書時代、京都の儒者伊藤仁斎（1627～1705）の塾「古義堂」の蔵書整理にあたったことから、その思想と学風に深く学ぶところがあった。

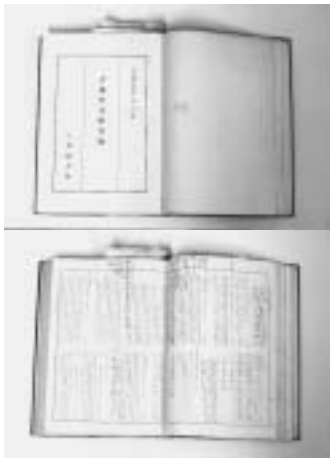
1. 『仁斎書誌略 古義堂文庫書誌第一』 富永牧太編 （天理図書館叢書第十四輯） 丹波市町 天理図書館 1944年6月
2. 『仁斎日記抄』 中村幸彦著 （日本叢書八三） 東京 生活社 1946年9月 手沢本
3. 「仁斎日記抄 原稿」中村幸彦自筆 200字詰原稿用紙114枚 ペン書き
4. 『古義堂文庫目録』天理図書館編（天理図書館叢書第二十一輯） 天理 天理大学出版部 1956年3月 手沢本
   礼状2通貼込（田山方南 長澤規矩也 より）
5. 「伊藤仁斎 人と思想」自筆ノート 1冊
6. 「仁斎の思想 資料」自筆ノート 1冊
7. 『童子問』 三巻三冊 伊藤仁斎著 宝永四年序跋［1707］ 猪飼敬所書込 正月の行事として、仁斎の主著『童子問』を祭って、澄明や屠蘇を供えるのをならわしとした。

世態人情の究明　－『戯作論』まで－

名著『戯作論』誕生のいしづえとなった先生の旧蔵書の一部。

8. 『戯作論』 中村幸彦著 東京 角川書店 1966年9月 手沢本
9. 『馬鹿文集』四巻四冊 藪野椿・物丹坊安輯（文化十三年刊のコピー）
10. 『風俗七遊談』三巻三冊 鈍菴斎著 無刊記（巻三はコピー）
11. 『都荘子』 四巻四冊 信更生纂 享保十七年一月[1732] 袋屋十良兵衛等刊
12. 『都老子』四巻四冊 名張湖鏡編著 宝暦二年一月[1752] 鶴本平蔵刊
13. 『気質評判乗合噺』五巻一冊 天明三年序[1783] 吉田九郎右衛門刊
14. 『忠臣水滸伝』前編五巻後編五巻十冊 山東京伝作 前編寛政十一年十一月[1799]・後編享和元年十一月[1801] 鶴屋喜右衛門刊
15. 『八景聞取法問』 五巻五冊 梅隠述 宝暦四年[1754] 西村源六刊
16. 『神霊矢口渡』 福内鬼外戯作 明和七年一月[1770] 綿屋喜兵衛等刊
17. 「戯作論資料 一・二」自筆ノート
18. 「戯作論」 自筆ノート

- 1 -



『古義堂文庫目録』（手沢本、1956）

『仁斎日記抄』（手沢本、1946）とその原稿

『戯作論』（手沢本、1966）

「戯作論資料」（自筆ノート）

『都老子』（宝暦２年）

物学びの王道をゆく

『東海道中膝栗毛』を読みほぐす

先生みずから成功したと語られる十返舎一九の『東海道中膝栗毛』（東京小学館 1975年12月）注釈。その参考に用いた江戸時代の案内記の記述から、一九が当時流布していた旅行案内記の間違いや文章をそのまま使っていることを実証したことで知られる。

19. 『東海道中膝栗毛』中村幸彦校注（日本古典文学全集49） 第2版 東京 小学館 1976年7月 手沢本
20. 『道中膝栗毛』八編十八冊 十返舎一九著 享和二～文化六年[1802－1809] 村田屋治郎兵衛等刊
21. 『諸国道中記』 前川六左衛門等刊 （内題：新板東海道木曽路道中記）
22. 『早見道中記』 十返舎一九序 文化二年三月改正[1805] 鶴屋金助等刊
23. 執筆用に蒐集した資料類

上田秋成に親しむ

先生にとって上田秋成（1734～1809）は他人事でない気持を抱く文人の一人であった。公私各所に残存する秋成資料を求め、諸家諸館を訪ね蒐集した資料は膨大な量にのぼる。

24. 『春雨物語』 上田秋成著 中村幸彦校註 大阪 積善館 1947年4月 手沢本
25. 『上田秋成集』中村幸彦校注（日本古典文学大系 56） 東京 岩波書店 1959年7月 手沢本
26. 『書初機嫌海』三巻三冊 上田秋成著 天明七年一月[1787] 増田源兵衛刊
27. 『藤簍冊子』六巻六冊 上田秋成著 文化四年一月[1807] 菊屋源兵衛等刊
28. 上田秋成坐像
29. 執筆用に蒐集した資料類

学者の鏡 －中村学集大成のあとさき－

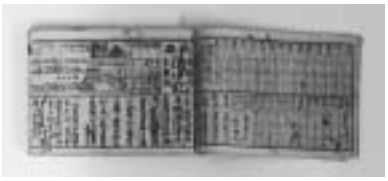
先生は1979年3月に関西大学を退職、「酔生夢死を本望とする」と由良に退隠されたが、そのお仕事ぶりは終生変わることがなかった。

第三十二回読売文学賞（1981年2月17日）

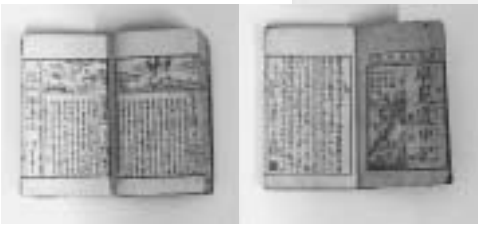
30. 『此ほとり一夜四歌仙評釈』 中村幸彦著 東京 角川書店 1980年8月 手沢本
31. 『此ほとり一夜四歌仙評釈』 中村幸彦著 再版 東京 角川書店 1981

- 2 -

十返舎一九著『道中膝栗毛』（享和２～文化６年）

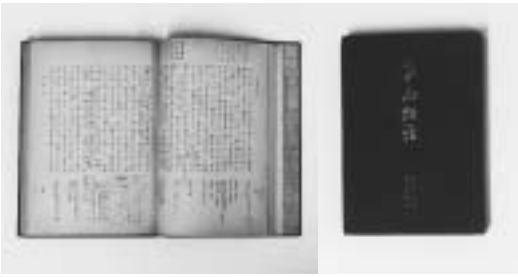


『諸国道中記』（前川六左衛門等刊）



十返舎一九序『早見道中記』（文化２年）

上田秋成著『藤簍冊子』（文化４年）



上田秋成著、中村幸彦校注『春雨物語』（手沢本、1947）

年5月
「第32回読売文学賞受賞！」の帯が付く。

32. 『宗因独吟俳諧百韻評釈』 中村幸彦著　東京　富士見書房　1989年9月　手沢本

昭和六十一年度朝日賞（1987年1月16日）
「『中村幸彦著述集』に至る日本近世文学研究への多大な業績」による。

33. 『中村幸彦著述集』 全15巻　東京　中央公論社　1982年～1989年　手沢本
34. 「［中村幸彦著述集 全巻構成・各巻目次等素案］」 中村幸彦自筆
著述集の企画前に自ら作製していたものと思われる。
35. 『中村幸彦著述集』 内容見本　［個人蔵］
36. 『建部綾足全集』　第8巻　東京　国書刊行会　1987年5月
著述集の外箱の意匠に用いた建部綾足の『海錯図』所収。
37. 「朝日賞の人びと　中村幸彦氏（文学研究）」
『朝日新聞』　1987年1月4日付朝刊　［個人蔵］
38. 「中村幸彦　この人・この3冊　今週の本棚」　掛斐高選
『毎日新聞』　1998年6月14日付朝刊　［個人蔵］

旧蔵名品少々

39. 『書経注疏』二十巻二十冊　（唐）孔穎達等奉勅撰　（唐）陸德明釈文　南宋版
内題は『尚書注疏』。漢には「尚書」といい、宋には「書経」と称した。
長澤規矩也氏に「稀覯珍本の由。天下の孤本ならん」（中村先生宛書翰）と評され、先生ご自身も「私の持っている一番いい本」とおっしゃった一品。
40. 『女殺油地獄』近松門左衛門著
昭和３８年秋天理図書館蔵の版木にて印刷。
41. 『浅草観音傳記』　無刊記
虫損甚だしいが珍本。
42. 『かた女覚帳』　写本
古書即売会で偶然手に入れた日記。後年、久留米藩主の娘で名家老有馬照長の妻になった「御豎」のものと判明。稀少資料。
43. 「筆写ノート」　一～三
学生時代、東京の帝国文庫にまで出かけ数々の書物を筆写した。この種のノート151冊はダンボール箱三つにぎっしりと納められている。
44. 「籍蔵」
書斎の入口に表札ふうに掛けられていた。板は大坂の「懐徳堂」学主

- 3 -

『書経注疏』（南宋版）

学生時代の「筆写ノート」

中井竹山（1730～1804）の講義机であった。
45. 写真　昭和59年夏山良の自宅にて
46. 「天下一本」　対談　中村幸彦　谷沢永一
『JAPAN AVENUE』　3巻3号 ジャパン・アベニュー社　1992年6月　［個人蔵］
47. 「創刊にあたって」　図書館長　中村幸彦
『関西大学図書館報　籍苑』　第1号　吹田　関西大学図書館　1976年3月

「中村幸彦文庫」の利用について

本学図書館内に設置した「中村幸彦文庫」は、規程による特別の文庫であり、また規程による未整理の図書資料にあたるため、その利用に制限があることをあらかじめご理解願いたいと思う。

図書館ホームページに添付のリストに掲載しているものについて、学内ならびに学外の研究者に限り、本学の規程にもとづき特別許可による閲覧ないしは特別複写のみについて利用が認められている。館外への貸出はできないので了承願いたい。

○洋装本、ノート、および手沢本は、当面利用できない。

○利用に際しては、本学図書館長あての特別閲覧ないしは特別複写の利用申請書を提出していただき、許可を得ていただくことになっている。あらかじめ所属の図書館を通じて、本学図書館相互利用係（電話06-6368-0265）へ連絡願う必要がある。

○本学図書館の開館日については、図書館ホームページの「開館日程」を参照のこと。特別許可申請に必要な様式（「貴重図書・準貴重図書閲覧願」、「特別複写許可願」）も、同ホームページの「各種申請用紙一覧」から入手できる。

（図書館次長　ふなこし　かずひで）